令和元年度第2回碧南市子ども・子育て会議 会議録

1 日時

令和元年11月15日（金）午後1時30分～午後2時30分まで

2 場所

碧南市文化会館 5階 研修室1

3 出席者及び欠席者

- (1) 出席者 中根潮美、河原厚司、板倉尚子、磯貝香織、城頭亜紀子、岡田真美、石川陽子、森英司、比嘉穰治、宮崎哲也、切江泰仁、山村孝幸、栗並えみ、鈴木理絵、大岩みちの（委員兼アドバイザー）
- (2) 欠席者 水野裕子、杉浦龍一、角谷竹虎、山田鈴子、
- (3) 事務局職員 福祉こども部長 遠山隆夫、こども課長 中川英治、指導保育士 神谷しづえ、指導主事 伊藤寛美、課長補佐 石井香代、幼保係長 磯貝浩、育成支援係主事 森田裕希子、福祉課発達支援係長 鈴木信恵、健康課母子保健係長 羽佐田美和子

4 傍聴者 0人

5 議題

- (1) 第2期碧南市子ども・子育て支援事業計画（案）について

6 議事録

- (1) あいさつ（中根会長）

- (2) 議題

ア 第2期碧南市子ども・子育て支援事業計画（案）について

事務局が資料に基づき説明

A委員：37 ページ、令和4年度から⑧<2号認定>（保育所）を減らすということだが、そうすると代わりに①<3号認定>（保育所）と③<3号認定>（保育所）の数字が令和4年度から増えないとおかしいのに、令和3年度から変わっていない。

事務局：保育所の提供体制は変わっていないが、②<3号認定>（認定こども園）と④<3号認定>（認定こども園）と書かれたところの令和4年度にニー

ズを見込んで動かしている。令和4年度に認可園が認定こども園でできた場合というイメージでこの表をつくっている。その分、⑨<1号認定>(認定こども園)、⑩<2号認定>(認定こども園)も3歳児から上は減っていくが、新しい園ができるとその分定員も増えるので、⑨<1号認定>(認定こども園)、⑩<2号認定>(認定こども園)は令和4年度から増加しているという形になる。

A委員：⑧<2号認定>(保育所)は保育所の数字だが、今3歳以上児に向けているところを保育所の0~2歳児に向けられるようにする趣旨だと思うので、①<3号認定>(保育所)の0歳児の保育所と③<3号認定>(保育所)が増えないとおかしいのではないか。

事務局：こちらは提供体制になる。人数の増減は保育園の方でもあると思うが、37ページの表は確保方策というところで、保育園としてキャパシティがどのくらいあるかというところなので、保育園は令和4年度では数や定員は増やさないイメージになるので、提供体制としては令和4年度になり、こども園のみが提供体制が増えたといった表になっている。ポイントとしては、保育園でも0~2歳児は増えたりするが、新しい保育園を作らないので①<3号認定>(保育所)、③<3号認定>(保育所)は人数が増えていない。ただ、裏では人数がどの園でも増えていく可能性がある。

保育所と認定こども園で分かれているのでイメージがつきにくいですが、0~2歳の保育所と子ども園の3号認定となっているものがたまたま分かれていて、こども園の中の保育所コースになるので、イメージ的には0~2歳の保育所とこども園を足した数字が提供体制になっている。なので、2つを足してもらい令和3年度と比較すると、合計が増えている。

A委員：ハード面が増えないのもそうだが、⑧<2号認定>(保育所)が減ると出ているから、①<3号認定>(保育所)や③<3号認定>(保育所)に動けるという意味だと思った。

事務局：保育園の考え方が、学校みたいに1クラス何人という考え方でなくて、面積基準と子どもの数と職員配置で定員が決まり、あくまでこの園が定員何人かという事しか言えず、年によって入る子どもの年齢や数と職員配置が変わってしまう。その中のトータルの中で数字を出している。イメージとしては、

その中で調整し3～5歳はほぼ幼稚園・保育園に通っていて、あと年齢が少子化もあり増える見込みはないが、その代わりに増えてくる見込みもあるので、その中で調整する。更に、新しい民間を作ることにより0～2歳の提供体制も増やしていく。

A委員：全体の子どもの数は増えないので、認定こども園ができると⑨<1号認定>（認定こども園）⑩<2号認定>（認定こども園）が増えるので⑧<2号認定>（保育所）を減らせるという事か。⑧<2号認定>（保育所）を①<3号認定>（保育所）、③<3号認定>（保育所）に向けるというように思っていた。

B委員：最近テレビ等で日中ワンオペ育児をしている人へのケアが必要ではないかという流れがあるので、そういった方への支援があると良いと思う。

事務局：数字はあがってきていないが、幼稚園や保育園でプチ保育や一時利用を使用している人もいる。

C委員：昨年、外国から戻ってきた時に、自分達の生活に戸惑いがあったという話があった。外国籍の子どもが多い地域でもあるので、施策の中に外国籍の子ども達に対する配慮を入れていただきたい。小学校への接続等も含めて考えていかなければならない。

事務局：こども課に教育補助という事で、通訳込みで各園を回っている職員がいる。個別で対応する中で、通訳の職員が親身になって保護者とやり取りする事と子どもの状況、例えば日本の子どもの中に溶け込めない子が実際にいて、通訳が子どもとやりとりを聞く中で、一般の日本の子どもや担任の先生に考えを伝えて具体的に示しながらやっている。更に、ポケットークを保育園、幼稚園に配置しており、先生の方から喋って聞かせて、今まで日本語が全く分からない子どもが翻訳機を通じて多少なりとも理解が出来て意思疎通ができるという現状が始まったところ。ただ、小学校にあがる場所は難しいところがあり、通訳に保育園・幼稚園から小学校にあがった子どもの親から相談があり、そういった事に対応している。試行錯誤しながら、色々な面を見ながら対応している。具体的に書くことまで行っていない。

C委員：具体的な目標があると、碧南の子育てに関して、グローバルな視野で見ていく事も分かるようになるし、特別支援の中に外国籍の子どもたちへの事も

盛り込まれているのが現状なので、なんとか付け加えていただきたい。やっているのであれば、今後のやり方は何かないのか。

事務局：試行錯誤しながらやっている。学校との関係も今色々な形で問題が見えてきている。学校で手を打っている部分もあるが、今後どうしていくか見えていない部分もある。

C委員：この計画は今後何年というものだと思うので、先ほど言った部分に触れていないと、そういう事を視野に入れていないという捉え方をされる事もあると思うので、何らかの形で記載すると良いのではないか。

D委員：今年初めて外国籍対応のアシスタントが各小学校に入る様になり、助かっているという話を聞いている。保護者への対応が学校の方では難しいという話は聞いているが、子ども達に関しては、言葉を覚えるのが難しい子はほぼ教室という所に集まって対応している。

C委員：子どもを産み育てていく中で、多様性をどうとらえ、柔軟に対応していくということであれば、障害があれ、言葉の違いがあれ、同じ様に考えていき、多様な人たちとつながっていくことが重要だと思う。

子どもを産み育てていく中で、多様性をどうとらえ、柔軟に対応していくということであれば、障害があれ、言葉の違いがあれ、同じ様に考えていき、多様な人たちとつながっていくことが重要だと思う。

D委員：碧南市独特の、94.5%の知人や親族がいるという、小さい市だから皆繋がっているからそういう事も出来るというとても暖かい面を持っているし、更にそこに、色々な方がつながって住んでいる事を活かして、いいところを伸ばしていけたら良いと思う。